

「燃燈仏授記」説話における散華供養者の 差異に関する一考察

小 山 一 太

目次

- 0. はじめに
- 1. 〈購華〉場面における蓮華の分配に関する記述
- 2. 〈散華〉場面にみる伝承形式の差異
- 3. 〈小品系般若経〉における授記説話
- 4. おわりに

0. はじめに

前世の釈迦が、過去仏である燃燈仏^①から未来世において仏となるであろう、と記を授かる「燃燈仏授記」説話は、南北両伝のテキストに多数保存されている。その「燃燈仏授記」説話を保存する諸々のテキストには、前世の釈迦をはじめとする様々な人物が、燃燈仏へ蓮華を投げ掛け供養する、いわゆる散華供養の場面が記されている。しかし、拙稿〔2020〕において、現西北パキスタンの山間部に位置するスワート〈Swāt〉地方から出土したとされるメトロポリタン美術館所蔵の「燃燈仏授記」浮彫図を図像解釈する際、テキストに説かれる、前世の釈迦が華売り娘から燃燈仏へ散華するための蓮華を購入する〈購華〉場面を整理したところ、華売り娘自身が燃燈仏へ散華供養することが記されるテキストと、華売り娘が散華供養を行わないテキストとが存在することが確認された。

よって本稿では、上記の2つのタイプの伝承形式を保存するテキストを今一度整理し、〈購華〉場面後の〈散華〉場面における他の散華者（国王、大臣、臣民など）についての記述も整理することにより、2つの伝承形式の差異について検討を行う。ひいては〈小品系般若経〉に保存される授記説話も参照、比較検討することで、2つの伝承形式の成立過程についても考察する。

1. 〈購華〉場面における蓮華の分配に関する記述

「燃燈仏授記」について言及するテキストは膨大な数に上るが、説話内容を詳細に記述するテキストに絞ればある程度その数は限定される。本稿で取り上げるテキストは以下の通りである。

Apadāna, Therī-Apadāna, 28. *Yasodharā* (PTS、以下、Ap.)

Mahāvastu, (Senart, É. [1882-1897]、以下、Mv.)

Divyāvadāna (Cowell, E. B. & R. A. Neil. [1886]、以下、Divy.)

後漢・竺大力、康孟詳共訳『修行本起経』^③ (T3, No. 184)

呉・支謙訳『太子瑞应本起経』 (T3, No. 185)

呉・康僧会訳『六度集経』 卷第八「八六、儒童受决経」 (T3, No. 152)

西晋・聶道真訳『異出菩薩本起経』 (T3, No. 188)

東晋・僧伽提婆 (又は曇摩難提) 訳『増一阿含経』 卷第十一 (T2, No. 125)

姚秦・仏陀耶舎訳『四分律』 (T22, No. 1428)

劉宋・宝雲訳『仏本行経』 (T4, No. 193)

劉宋・求那跋陀羅訳『過去現在因果経』 (T3, No. 189)

隋・闍那崛多訳『仏本行集経』 (T3, No. 190)

上記のテキスト中、サンスクリットテキスト2経、漢訳テキスト9経は、「燃燈仏授記」説話中において、先述した〈購華〉、〈散華〉両場面の記述を有している。パーリテキストであるAp. では、〈購華〉場面について言及するものの、その後の〈散華〉場面に関する記述はない。拙稿[2020]において、前世の釈迦であるバラモン青年と華売り娘との蓮華の分配について3つのタイプに大別したが、今一度、その内容を詳細に確認してみよう。

A) 娘から5本を購入 (or 与えられ)、残りの2 (or 3) 本は娘自身が散華するために残す。^④

Ap. *Therī-Apadāna*, 28. *Yasodharā*, 48-50, 588

高志ある仙人にいたく信心して、他に施す廣き者を見ざりしかば卿仙人に華を施せり。

「五本は卿のものたれ、三〔本〕は我がものたれ、仙人よ、それによりて卿の菩提義に平等悉地にあれかし、仙人よ。」^⑤ (『南伝』: 474)

Mv., I, 233, 4-6.

メーガ青年は（少女に）話した。「私は、あなたのために500プラーナを与えよう。〔かわりに、〕私のために5本の青蓮華を与えなさい。私はこれら5本の青蓮華によって世尊デ
イーパンカラを供養するつもりである。あなたもまた2本〔の青蓮華〕によって献じなさい。^⑥」

Divy., XVIII, 250, 1-2.

このように言った時、5本の蓮華は彼の少女によって彼のスマティに与えられ、2本は自身（少女）によって保持された。^⑦

B) 娘から5本を購入、2本は託される。

『修行本起経』（T3, 462a09-b03）

時有一女、持瓶盛花。佛放光明徹照花瓶變爲琉璃、内外相見。菩薩往趣而説頌曰、銀錢凡五百、請買五莖花、奉上錠光佛、求我本所願。（中略）於是便可之歡喜、受花去。意甚大悦。今我女弱、不能得前。請寄二華、以上於佛。

『太子瑞応本起経』（T3, 473a06-15）

瞿夷念、華極直數錢、乃雇五百。貪其銀寶、與五莖華、自留二枚。（中略）今我女弱、不能得前。請寄二華、以獻於佛。

『異出菩薩本起経』（T3, 617b24-c17）

須臾有一女人、名曰俱夷。持應水瓶、有華七枚。華名優鉢。（中略）便以優鉢華五枚與之、俱夷自留二枚。菩薩曰、可便以手中華二枚與菩薩、令上佛。俱夷言、婦人不能得前。願以華累卿。菩薩便受之、各自別去。

『四分律』（T22, 785a18-22）

時以五百金錢買五莖蓮花、餘二莖花、與彌却摩納言、此是我花寄汝、以上定光如來、何以故、願與汝所生之處常不相離。賈人當知、爾時彌却摩納得此七花已…。

『仏本行経』（T4, 92c12-93a08）

時見一女子、挾持香水瓶。中有七青蓮、（中略）即取其價、與花五莖、別託二枚以結誓願。

『過去現在因果経』（T3, 622a20-22）

善慧又言、請、以五百銀錢、雇五莖耳。(中略)青衣答言、善哉、善哉、敬從來命。今、我女弱、不能得前。請、寄二花、以獻於佛。

『仏本行集経』(T3, 667a25-27)

是時、彼女、從我邊受五百金錢、即授五莖優鉢羅華、持以與我、其餘兩莖爲我布施…。

C) 娘は5本の蓮華を所持しており、5本とも購入する。

『六度集経』(T3, 48a24-25)

道逢前女採華挾瓶。從請華焉得華五枚。

『増一阿含経』(T2, 599a10-11)

是時便持五百金錢用買五枚華、與彼女人、共作誓願、各自別去。

以上のように、蓮華の分配に関する記述によりテキストを3つに大別すると、タイプAのように、華売り娘が所持する7本(もしくは8本)の蓮華中5本を、バラモン青年に金銭との交換によって与え、残りの蓮華は自身が燃燈仏へ散華供養するために保持する、という記述を保存するテキストは、パーリ、サンスクリットテキストの3経であり、5本をバラモン青年に売却した後、残りの2本を無償譲渡する、という記述を保存するタイプB、また、華売り娘が所持する蓮華は元々5本であり、すべてを売却するという記述を保存するタイプCに分類される残り9経では、華売り娘は自身で散華供養を行わないことが確認された。つまり、パーリ、サンスクリットテキストでは、華売り娘自身が燃燈仏へ散華供養を行うという伝承形式、漢訳テキストにおいては華売り娘は散華供養を行わないという伝承形式がそれぞれ保存されており、テキストの成立地域または訳出地域により伝承形式が異なっている。

パーリ、サンスクリットテキスト3経の現行本の成立年代よりも、明らかに訳出年代が上る漢訳テキストが存在するが、漢訳テキストに保存される伝承形式がより古層に位置する証左とはならないことは拙稿[2020]において論じた通りであり、現パキスタンにおいて、タイプAの伝承形式と親和性の高い、A.D. 1世紀後半頃からA.D. 3世紀までには制作されたであろう「燃燈仏授記」浮彫図が現存することからも言えよう。

2. 〈散華〉場面に見る伝承形式の差異

〈購華〉場面後の〈散華〉場面では、先に挙げた〈散華〉場面を有さないAp.を除く11経のテキストすべてにおいて、バラモン青年が投げ掛けた華はそのまま空中に留まる、もしくは天

蓋、華蓋、宝蓋などに変じて華が地に墜ちることはなかったことが記される。Mv. では、散華された蓮華の描写について、メーガが投げ掛けた5本の蓮華とプラクリティが投げ掛けた2本の蓮華、さらに他の人々が投げ掛けた蓮華は、燃燈仏が加持すると華の天蓋となったと記され、^⑧バラモン青年と華売り娘以外の人々が散華した蓮華も同じく華の天蓋となり、空中に留まったことが記されている。Divy. にはその他の人々が散華した華の描写はない。その他の人々が散華した蓮華の描写について言及する3経の漢訳テキストでは、以下のように記される。^⑨

『太子瑞応本起経』（T3, 473a16-17）

國王・臣民皆迎拜謁、各散名華、華悉墮地。

『異出菩薩本起経』（T3, 617c18-19）

國王以下至萬民、皆以百種雜華、散佛頭上。華皆墮地。

『過去現在因果経』（T3, 622b03-04）

如是次第、至諸大臣。亦各禮敬、并散名花。花悉墮地。

上記の3経では、バラモン青年以外の人物が散じた華は悉く皆地に墜ちた、とされ、Mv. の記述とは相反する記述を有している。これは、華売り娘が散華供養を行わない漢訳テキストにおいて、バラモン青年が散じた華のみが空中に留まった、という事象を強調するための表現のように推測される。この後、バラモン青年は燃燈仏から記を授かるが、バラモン青年が散じた華のみが空中に留まるという事象は、他の人物とバラモン青年との差別化を図るとともに、バラモン青年が仏と成ることが確定することを暗示している。つまり、諸々の漢訳テキストにおいて、燃燈仏に対して華売り娘が散華供養を行わない事由としては、これから仏道を歩もうとする前世の釈迦、換言すれば菩薩の超凡性を強調するためともいえよう。

さらに、この3経に共通する点として、バラモン青年が授記を受けるタイミングが挙げられる。基本的に「燃燈仏授記」の因行としては布髪供養が挙げられるが、先に挙げた12経中上記の3経および『六度集経』では、散華供養後に授記が行われ、その後、布髪供養が行われる。^⑩さらに、『太子瑞応本起経』、『異出菩薩本起経』は、バラモン青年による〈上求菩提下化衆生〉を含む誓願が見られず、散華供養による授記、いわゆる「業報授記」系統に属している。この2経においては、バラモン青年の散じた華のみが空中に留まるという事象が、因行としての散華供養を格別に強調するための機能を果たしている。

3. 〈小品系般若経〉における授記説話

華売り娘の散華供養の有無については、いわゆる〈小品系般若経〉^⑪に保存される授記説話も参照する必要がある。

サンスクリット本『八千頌般若経』〈*Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā Sūtra*〉の異訳類本、いわゆる〈小品系般若経〉の一つである『小品般若経』(以下、『小品』)は、弘始10年(408)に鳩摩羅什により訳出された漢訳文献である。『小品』^⑫巻第七「恒伽提婆品第十八」には、恒伽提婆〈gaṅgādevī〉という女性が釈迦仏により授記され、来世において金華と号する仏となり、男子と為ることを得て、阿閼仏国土に生じることが説かれている。この恒伽提婆とは、「燃燈仏授記」説話に登場する、釈迦の妃の前生である華売り娘であり(赤沼[1931: 370]、渡辺[2011: 95-96])、この恒伽提婆が阿耨多羅三藐三菩提の善根を得る起因として「燃燈仏授記」説話が引用される。

恒伽提婆の誓願、釈迦による授記の場面を抜粋すると以下の通りである。

〈恒伽提婆女人の誓願場面〉(T8, 568b08-11)

その時、会中に恒伽提婆という名の女人がいた。〔その女人は〕偏袒右肩で座より起ち、右膝を地に着け仏に向かい合掌し、仏に申し上げて言うに、「世尊よ、私はこの事(般若波羅蜜の法を聞くこと)に対して驚きもしないし、怖くありません。私は来世において衆生にこの要を演説しましょう。」と。そして、金華を手に取り仏に散じると、〔それらは〕仏の頭上の虚空中に留まった^⑬。

〈釈迦仏による授記場面〉(T8, 568b12-b17)

その時仏は微笑した。阿難は(中略)仏に申し上げて言うに、「世尊よ、何の因、何の縁をもって微笑されたのでしょうか。諸仏は法を常とし、因縁無くして笑うことはありません。」仏は阿難に告げられた、「この恒伽提婆女人は、来世星宿劫中において成仏を得、金華と号するだろう。(さらに、)今女身より転じて男子となることを得て、阿閼佛土に生じるだろう。」と^⑭。

『小品』ではこの後、燃燈仏在世時の釈迦と恒伽提婆の因縁を説く。その場面を要訳すると以下の通りである。

阿閼仏の仏国土に生じた恒伽提婆女人は、そこで梵行及び阿耨多羅三藐三菩提を常に修し、

命終の後、様々な仏国土に至り、同じ様に梵行及び阿耨多羅三藐三菩提を修した。その結果、阿耨多羅三藐三菩提を得ることができた。すると阿難は、「何処で初めてこの女人は、阿耨多羅三藐三菩提の善根を得るきっかけを得たのか」と、釈迦に質問をした。それに対し釈迦は、「この女人は燃燈仏の所で初めてその善根のきっかけを得た。つまり金華を燃燈仏へ散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求めたのだ。そして、私も燃燈仏へ5茎の華を散じ、それがきっかけで燃燈仏が私の善根が成就したことを知り、燃燈仏から阿耨多羅三藐三菩提の記を授かった。その時、女人は私が授記されるのを聞き、『私も同様に未来世において記を授かりたい』と願を發した。よって女人は現在において阿耨多羅三藐三菩提を得ることができたのだ」と答えた。(T8, 568b17-c10)¹⁵⁾

以上のように、恒伽提婆の前生である華売り娘は、『小品』によると自身で燃燈仏へ散華供養を行ったと記述される。〈小品系般若經〉に属する光和2年(179)に訳出された支婁迦讖訳『道行般若經』においても同様の記述がみられることから、〈般若經類〉においては初期の段階から華売り娘による散華供養が採用されていたことになる。『小品』および『道行般若經』において、華売り娘の散華供養を含む「燃燈仏授記」説話は、恒伽提婆の初發意の時期の設定のため援用されたと推測され、阿闍世信仰を前提とした阿闍世仏国土への女人往生(『小品』においては変成男子してからの往生)の説話を補完する役割を担っている。つまり、「燃燈仏授記」説話を保存する漢訳テキスト9經において散華供養の記述のない華売り娘であるが、最初期に漢訳されたテキストを含む〈小品系般若經〉においては、自身で燃燈仏へ散華供養を行ったと読み取ることが可能な記述がみられることから、パーリ、サンスクリットテキストの現行本3經に保存される「燃燈仏授記」説話が、漢訳テキスト9經に保存される伝承形式に遅れるとは言い難い。

しかし、一つの可能性として、漢訳テキスト9經に説かれるような散華供養を行わない華売り娘の伝承をより簡素な形とした「燃燈仏授記」説話が、ガンダーラ文化圏に存在していたと仮定すれば、その原初形態ともいえるべき「燃燈仏授記」説話を〈小品系般若經〉が先述の事由から援用改変し、華売り娘自身が燃燈仏へ散華供養するという内容の伝承が創作され、その伝承がMv. および Divy. などの仏伝テキストに保存される「燃燈仏授記」説話に転用された、という仮説が立てられよう。

さらに、平川 [1968]、Harrison [1995]、下田 [1997] などにより、Mv. の大元の帰属部派である大衆部と〈般若經〉とが密接に関係していることが指摘されており、大衆部と〈般若經〉との関係性を論じる際、この両文献にみられる華売り娘の散華場面の一致は大変興味深い記述である。

4. おわりに

本稿では、テキストに保存される「燃燈仏授記」説話に登場する散華供養者の差異について、諸々のテキストの〈購華〉および〈散華〉場面を整理、比較検討し、さらには〈小品系般若経〉における授記説話を参照することによりそれらの伝承形式の成立過程についても若干の考察を行った。論じた内容をまとめると以下になる。

- ・ パーリ、サンスクリットテキストでは、華売り娘自身が燃燈仏へ散華供養を行うという伝承形式、漢訳仏伝テキストにおいては華売り娘は散華供養を行わないという伝承形式がそれぞれ保存されているが、漢訳を含む〈小品系般若経〉には、パーリ、サンスクリットテキストに保存される伝承形式と親和性の高い記述がみられる。
- ・ 諸々の仏伝漢訳テキストにおいて、燃燈仏に対して前世の釈迦のみが散華供養を為す事由としては、前世の釈迦の超凡性を強調するために他の人物との差別化が図られたためであり、さらに、空中に留まる蓮華が成仏の確定を暗示する象徴としても機能している。
- ・ 〈小品系般若経〉において、華売り娘の散華供養を含む「燃燈仏授記」説話は、恒伽提婆の初発意の時期の設定のため援用されたと推測され、阿闍仏信仰を前提とした阿闍仏国土への女人往生の説話を補完する役割を担っている。

略号と参考文献

Ap. : *Apadāna*, ed. by Mary E. Lilley, Pali Text Society, 2000.

Divy. : *Divyāvadāna*, ed. by Cowell, E. B. & R. A. Neil.

1886, *A Collection of Early Buddhist Legends*, Combridge (Reprint : 1970, Amsterdam: Oriental Press/Philio Press).

Mv. : *Mahāvastu*, ed. by Senart, É.

1882-1897, *Le Mahāvastu*, 3vols, Paris.

T : [1924-32] 『大正新修大蔵経』 大蔵出版.

『南伝』 : [1935-41] 『南伝大蔵経』 大蔵出版.

Behrendt, K. A.

[2007] *The Art of Gandhara in the Metropolitan Museum of Art*, New York.

Burgess, J.

[1897] *The Ancient monuments, Temples and Sculptures of India*, 2 vols, Griggs, W: London.

Dagens, B., M. Le Berre, & Schlumberger, D.

[1964] *Monuments Préislamiques d'Afghanistan, MDAFA XIX*, Librairie G. Klincksieck: Paris.

Foucher, A.

[1909] "Le Grand Miracle' du Buddha à Śrāvastī," *Journal Asiatique*, 1909, 5-78.

[1942] *La vieille Route de l'Inde de Bactres à Taxila*, Vol. 1, Les Editions d'art et d'histoire:

- Paris.
Gerard, J. G.
[1834] *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, vol.III, Bishop's College Press: Calcutta.
Harrison, P.
[1995] 'Some Reflections on the Personality of the Buddha', *The Otani Gakuho*, vol.LXXIV, no. 4, 1-29.
- 赤沼智善
[1925] 「燃燈仏の研究」『仏教研究』6-3, 317-340.
[1939] 『佛教經典史論』三寶書院.
- 小山一太
[2017] 「ガンダーラ文化圏における燃燈仏授記図の展開—法蔵部所伝文献を手がかりとして—」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』39, 69-96.
[2018] 「「燃燈仏授記」と「アショーカ王施土」の説話をセットとする図像について」『密教図像』37, 18-36, 口絵4-1, 4-2.
[2019a] 「「燃燈仏授記」図の初期相に関する一考察：ガンダーラ文化圏出土作例の資料集成および基礎的研究」『龍谷大学佛教学研究年報』23, 68(99)-44(123).
[2019b] 「「燃燈仏授記」図の受容形態の変容：〈購華〉場面の機能をてがかりとして」『仏教学研究』75, 35-58.
[2020] 「メトロポリタン美術館所蔵「燃燈仏授記」浮彫図の図像解釈」『印度学仏教学研究』68-2, 946-943.
- 河野 訓
[2007] 『漢訳仏伝研究』皇學館大学出版部.
- 岸 一英
[1976] 「般若経と阿闍世信仰」『仏教論叢』20, 143-146.
- 佐藤直美
[2005] 「アクション・オブ・ザ・誓願の特徴」『四天王寺国際仏教大学紀要』41, 27-40.
- 志知丈夫
[1990] 「『道行般若経』における授記について」『待兼山論叢：哲学篇』24, 43-57.
- 下田正之
[1997] 『涅槃經の研究：大乘經典の研究試論』春秋社.
- 田賀龍彦
[1974] 『授記思想の源流と展開』平楽寺書店.
- 平岡 聡
[2007a] 『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』上巻, 大蔵出版.
[2007b] 『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』下巻, 大蔵出版.
[2010a] 『ブッダの大いなる物語 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』上巻, 大蔵出版.
[2010b] 『ブッダの大いなる物語 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』下巻, 大蔵出版.
[2015] 『大乘經典の誕生』筑摩選書.
- 干潟龍祥
[1954a] 『本生経類の思想史的研究』東洋文庫.
[1954b] 『本生経類の思想史的研究 附篇』東洋文庫.

平川 彰

[1968]『初期大乘經典の研究』春秋社.

平山郁夫シルクロード美術館編

[2009]『ガンダーラー仏像のふるさとー』平山郁夫シルクロード美術館.

松村淳子

[2008]「パーリ文献中のスメダ・カター：南方仏教伝承の総括および北伝資料との関連について」『印度学仏教学研究』56-3, 1086-1094.

[2011]「北伝仏教文献の燃燈仏授記物語：分類の試み」『印度学仏教学研究』59-3, 1137-1146.

[2012]「燃燈佛授記物語の形成と発展：『聖燃燈授記大乘經』と他の諸伝承との関係」『印度学仏教学研究』60-3, 1204-1213.

宮治 昭

[2010]『インド仏教美術史論』中央公論美術出版, 74-91.

村上東俊

[2012]「燃燈仏に見られる焰肩と『六度集經』について」『印度学仏教学研究』(60) 2, 1042-1039.

渡辺章悟

[2011]「第三章 大乘仏典における法滅と授記の役割：般若經を中心として」桂紹隆・他編『シリーズ大乘仏教 第二巻 大乘仏教の誕生』春秋社, 73-108.

註

- ① 燃燈 (skt. Dipamkara) 仏には、定 (錠) 光如来、提和竭羅など、様々な漢訳が存在するが、本稿においては引用文を除き、便宜上「燃燈仏」で統一する。
- ② 「燃燈仏授記」説話を保存するテキストについては赤沼 [1925]、田賀 [1974: 128-169]、松村 [2008; 2011]、拙稿 [2017; 2019a] などを参照。
- ③ 漢訳テキストは訳出年代順に記載したが、現存最古の漢訳仏伝テキストとされる『修行本起經』の現行本は、近年において『太子瑞應本起經』をもとに後代に成立し、また、東晋代までの翻訳テキストをもとに増広された可能性が指摘されている (河野 [2007: 150])。
- ④ なお、*Apadāna* では、〈布髮〉、〈浮遊〉場面を欠くが、従来より北伝テキストとの対応が見られることが指摘されている。*Therī-Apadāna* 中の *Yasodharā* と題される箇所 (の〈購華〉場面においては、注5のように記されており、その後の〈散華〉場面は簡略的な記述である。
- ⑤ *Apadāna*, *Therī-Apadāna*, 28. *Yasodharā*, 48-50: PTS, 588
 48. Bhiyyo cittaṃ na pasādesiṃ ise uggattamānase Deyyaṃ aññaṃ na passāmi demi pupphāni te ise.
 49. Pañcahatthā tavaṃ hontu hontu mamaṃ ise Tena siddhi saha hotu bodhanatthāya tvaṃ ise.
- ⑥ Mv., I, 233, 4-6.
 megho māṇavo āha // ahan te paṃca purāṇaśatāni demi dehi me tāni tāmi paṃca utpalāni / ahaṃ etehi paṃcahi utpalehi bhagavantaṃ dipamkaraṃ pūjayaṣyāmi / tvaṃ hi dvihi pi arcaya //
- ⑦ Divy., XVIII, 250, 1-2.
 evam ukte tayā dārikayā tasya sumateḥ pañca padmāny anupradattāny ātmanā dve grhīte /
- ⑧ Mv., I, 238, 6-9.

bhagavato dipaṃkarasya yā ca meghena māṇavena paṃca utpalāni kṣiptā yā ca prakṛtiye māṇavikāye yā ca anyāye janatāye kṣiptā taṃ bhagavato puṣpavitānam adhiṣṭhitam satvānāṃ vaineyavaśena meghasya māṇavasya prītiprāmodyasaṃjānanārthaṃ prāsādiko darśaniyo catuṣṭhūṇo catuḥdvāro osaktapaṭṭadāmakaḷāpo //

- ⑨ 『仏本行集経』では、以下のように、Mv. と同様にバラモン青年以外が投げ掛けた華も空中に留まり大宝蓋となったとあるが、これは燃燈仏の神通力によるものであり、Mv. には蓮華を虚空に留まらせた理由を、燃燈仏が人々を教導するためであるとするが、諸々の漢訳テキストではその理由を明示しない点も、空中に留まる華の意味合いが Mv. や Divy. と異なっている一証左となりうる可能性がある。さらに『仏本行集経』に保存される「燃燈仏授記」説話に関して田賀 [1974] は、「業報授記」と「誓願授記」の2つの系統の融合が図られている、とするなど、様々な要素が流入するテキストであるため、取り扱いが困難である。

爾時、彼處聚集無量無邊異類人、及非人、天龍八部諸鬼神等、所將香末、種種雜花以散佛上、無有一華墮落於地。並在燃燈如來頂上虚空之中、成大寶蓋。『仏本行集経』(T3, 667b11-15)

- ⑩ 各テキストの「燃燈仏授記」説話の内容の項目別順序の詳細に関しては田賀 [1974: 151-152] の図を参照。
- ⑪ 「小品系般若経」に分類される文献としては、サンスクリット本『八千頌般若経』、チベット語訳の他、以下漢訳7経が現存する。①支婁迦讖訳『道行般若経』十卷、②支謙訳『大明度無極経』六卷、③竺法護訳『摩訶般若鈔経』、④鳩摩羅什訳『小品般若経』、⑤玄奘訳『大般若波羅蜜多経 第四会』十八卷、⑥玄奘訳『大般若波羅蜜多経 第五会』十卷、⑦施護訳『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』二十五卷。
- ⑫ 『出三蔵記集』卷第二「新小品経七卷 弘始十年二月六日譯出、至四月二十日訖。(中略) 天竺沙門鳩摩羅什以偽秦姚興弘始三年至長安。於大寺及逍遙園譯出。」(T55, No.2145, pp.10c18-11a27)
- ⑬ 爾時、會中有一女人字恒伽提婆。從座而起偏袒右肩、右膝著地合掌向佛、白佛言、世尊、我於是事不驚、不怖。我於來世亦爲衆生演說斯要。即持金華散佛、當佛頂上虚空中住。(T8, 568b08-11)
- ⑭ 時佛微笑。阿難從座起偏袒右肩、右膝著地合掌向佛、白佛言、世尊、何因、何緣、而發微笑。諸佛常法、不以無因緣而笑。佛告阿難、是恒伽提婆女人、當於來世星宿劫中而得成佛、號曰金華。今轉女身得爲男子、生阿閼佛土。(T8, 568b12-b17)
- ⑮ 於彼佛所常修梵行、命終之後從一佛土至一佛土常修梵行乃至得阿耨多羅三藐三菩提、不離諸佛。譬如轉輪聖王從一觀至一觀從生至終足不踏地。阿難、此女亦如是、從一佛土至一佛土常修梵行乃至得阿耨多羅三藐三菩提常不離佛。阿難作是念、爾時菩薩衆會如諸佛會、佛即知阿難心所念。告阿難言、如是如是、當知爾時菩薩衆會如諸佛會、阿難、是金華佛聲聞入涅槃者無量無邊不可計數、其世界中無諸惡獸怨賊之難、亦無飢饉疾病之患。阿難、是金華佛得阿耨多羅三藐三菩提時、無如是等怖畏之難。阿難白佛言、世尊、是女人於何處初種阿耨多羅三藐三菩提善根。阿難、是女人於燃燈佛所初種善根。以是善根迴向阿耨多羅三藐三菩提。亦持金華散燃燈佛、求阿耨多羅三藐三菩提。阿難、爾時我以五莖華散燃燈佛、求阿耨多羅三藐三菩提。燃燈佛知我善根淳淑、即授我阿耨多羅三藐三菩提記。時此女人、聞我受記、即發願言、我亦如是於未來世當得受記。如今是人得受阿耨多羅三藐三菩提記。阿難、是人於燃燈佛所初種善根、發阿耨多羅三藐三菩提心。(T8, 568b17-c10)